

子どもの背景をしる」と

島本 政志

富山市立堀川小学校で驚いたのは、授業記録の詳細さである。そして、それは子どもの発言をしつかりと受けと埋めようとするためである。

私は3年生のクラスを見学した。そこでは一日の振り返りをしていて、ある男子児童が徒競走で〇〇くんに勝った、〇〇くんに負けたといったことを中心に話していた。

そのような話が5分続いた。担任の先生はその話を肯定的に受け止めているようだった。

教務の先生に尋ねた。

「私だったら、『そんなに勝った、負けたの話をするんじゃないよ。大切なのは誰かに勝つかどうかではなくて、自分の記録を伸ばすことだ』とかを言いいいそうなのですが。」

教務の先生は概ねこのような趣旨のことを答えてくださった。

「まず、勝った、負けたというその感情を受けとめます。Nくんはこの徒競走のために毎日の練習をがんばってきました。この徒競走で勝てば、さらに大きな大会にでることが出来ます。彼にとってはこの徒競走での勝利は何よりも大切な、今までの努力をかけたものだったんです。」

(文責・島本)

私は自分が少し恥ずかしくなった。

「勝った、負けたと言うものじゃないよ。」

というのは教師ならだれでも言いそうな一般論である。当たり前のことだ。

そう、子どもの背景を知らなくても言える、ありきたりの、どこにでもある言葉なのである。

当然、私はNくんの担任ではない。だから背景も知るはずがない。

しかし、このような構図の教師と子どもとの関係は至るところに存在するような

気がする。

つまり、「俺の気持ちも知らないくせに指導する教師」ということだ。

勝利をめざして毎日の練習をしてきた子に対して、「勝ち負けじゃないんだ」と言えるだろうか。

子どもの背景を知ることによって発言の受け止め方が全く変わった。

堀川小はいくつも本を出版している。

その中で授業の研究の第一章では

「現場の研究は子どもから出発しなければならぬはずであるのに、どこかで打ち立てられた教育理論を逆に子どもにおしつけて、借りものの教育理論で論議をし、その原理の枠の中で右往左往し、研究のすなおな発展をむりに曲げていることとはないであろうか。」と述べている。

独断的な信念にかちかちになって、すなおに子どもから学ぶ謙虚さと、自主的な研究のねばり強さを失いかけてはいないだろうか。」と述べている。